

一手段と云ふ可し。鳥は其命甚だ脆く、后頭に一打を享くれば忽ち斃る。故に此鳥を採集する者の手には、棍棒あれば足り、敢て他具を要せざるなり。又注意して鳥の背後に廻り、直ちに頸をつかめば容易に生擒し得可し。

鳥の体殊に羽毛の臭氣は、特異にして、長く脱せず、之れ水禽類には特に發達する。皮脂腺の分泌する處ならん、然れども皮下の肉に至りては、其臭氣羽毛の如く甚しからず、赤味を帯び軟和なり。在鳥者等は喜て之を食ふ、但し食する前一日位海水に浸し置き、其臭氣を脱せしむと云ふ。又鳥の体には脂肪多きを以て、之を絞る時は、透明なる油を得可し。在鳥者は夜間此油を點燈の用に供す。

鳥の皮膚には一種の虱寄生す、黒色にして形大なり。又巢の中には一種の「ダニ」ありて、往々人身に傳播して患者を來すとありと云へり。予は虱を獲たれども、「ダニ」は一も見ざりき。

此鳥の羽毛は本島の重要な物産にして、開島以來採收せし高は已に十數萬斤の多額に上れり。而して之が爲めに撲殺せられし鳥數は又夥しく、屍體は積て山をなし、島内各處に白骨の累々たるを見る(前卷に挿入せる圖中白く見ゆるは鳥の白骨なり)。

此等の骨も亦骨粉となさば、農家に須用の肥料たらん、予は初め鳥の棲息の饒多なるより、「デア」の存在を疑ひ、百方搜索せしも、遂に發見せざりき。是れ本島には降雨の可なり瀕繁なるが故に、鳥糞堆積するに至らず、皆流れ去るによるならん。

已往三四年間に於ける「アホウトリ」の採集は、其方法の宜しきを得ざりし爲め濫獲に陥り、今や其結果の争ふ可からざる者あるを認む。在鳥者の言に徴するに、三十二年秋期より本年春に至る鳥の最多き期節にも、鳥數は大に少く、且つ營巢産卵する者の如きは、殆んど數ひ得る程の少數なりと。又本年度採集の鳥羽を検するに、黒色羽毛甚だ多し、之れ未だ成熟期に達せざる幼鳥を撲殺せし證なりとす。且つ島内各處に残留せる鳥の巢に就て檢するも、前年度に於ける巢と本年度の者とは其數に於ても、又其構造に於ても、著しき差異あるを認む。乃ち數年前の巢の高さは七八寸ありたるに、一昨年のは五六寸にすぎず、次に昨年のは四寸乃至三寸五分に減ぜり。又巢と巢との間隔も、古き巢にては、二尺乃至三尺位なりしに、新しき巢の隔りは七尺に至れり。以て巢の數の減したるを知るに足る。此鳥は生後少くも二年を経されば生産力なく、又卵の如きも、一年僅かに一個を産むのみなれば、繁殖の迅ならざる者と云ふ可し。故に若し本島の鳥採集の法從來の如くならば、數年を出てずして、無量數萬の巨禽も、島上に其姿を見る能はざるに至らん。是れ今日に於て此鳥を保護するの必要ある所以なりとす。

本種は小笠原島の鳥島に棲息する「アホウトリ」とは全く同種にして、亞細亞、亞米利加の沿海乃至太平洋には普通の種類なり。其分布北は千島より、南は清國「アモイ」「チーフ」に至る。但し生殖地として今日迄吾人の知る處本邦内にありては、小笠原群島中の鳥島(三子島名)と、本島を含める尖閣列島なりとぞ。